

IAEG 総会，第 11 回 IAEG アジア地域会議および第 15 回海外調査団参加報告

副会長 茶石貴夫

国際委員長 伊藤久敏

1. はじめに

第 11 回 IAEG アジア地域会議（アジアシンポジウム），略称 ARC-11 が 2017 年 11 月 28 日～30 日にネパールの首都カトマンズで開催された。また，この会議に合わせ，毎年開催される国際応用地質学会（IAEG）の総会が開催された。

日本応用地質学会は，ARC-11 の地質巡検の一つとして第 15 回海外調査団を派遣し巡検にも参加した。幸い会員諸氏の協力を得て 20 名の調査団を結成することができ，また ARC-11 には日本から 50 人近い参加者があり大変盛況であったが，日本からの若手の参加が少なく，平均年齢が高いことが今後の課題であることを再認識した。VietGeo2016 参加報告（応用地質第 57 巻，第 6 号）でも述べたが，若手会員の積極的な国際会議への参加を期待したい。なお，次回 2019 年の ARC-12 の開催地は韓国の済州島と決まっている。以下に ARC-11 および IAEG 総会の概要を報告する。

2. 第 11 回 IAEG アジア地域会議（ARC-11）

- ・開催日：11 月 28 日～30 日，プレツアー27 日，ポストツアー12 月 1 日～3 日
- ・テーマ：Engineering Geology for Geo-disaster Management(地質災害マネジメントのための応用地質学)
- ・参加人数等

会議前の登録で，海外からの参加者が 218 名，ネパールから 89 名の合計 307 名，これにネパールの学生が特別参加で加わり，開会式には約 450 名が参加した。日本からは中国に次いで多い約 50 名の参加者があり，開会式において共同コンビーナーのランジャン・クマール・ダハル准教授(トリブバン大学)から謝辞が述べられるとともに，会議の開催に尽力された日本応用地質学会前会長の長谷川修一教授の功績が紹介された。

- ・開会式等

もと王室専用であった豪壮なホテル(Hotel Yak and Yeti)の会場で，初日の開会式にはものしい警備のもとネパール民主共和国のバタライ大統領が来賓として参列し国歌斉唱が行われた。今回の ARC-11 はネパール地質学会最大の行事であり，ネパールでのこの会議の扱われ方の大きさがうかがわれた。インフラの整備や防災事業に向けて，国をあげて地質技術者を養成するという政策があるものと思われた。しかし，会議を運営する上での資金事情は厳しいようであった。

発表会場は毎日盛況であり，ホテルの中庭でビュッフェスタイルのランチが提供されるなど，晴天にも恵まれ，和やかな雰囲気会で会議が行われた。ただ，閉会式はネパール地質学

会や実行委員会の責任者から同じような謝意の挨拶が約 1 時間半延々と続き、正直閉口した。

・講演と発表

プログラムでは、基調講演が 13 (受賞記念講演を含む)、口頭発表が 153 (セッション数 25)、ポスター発表が 69 と非常に多かった。3 日間、3 会場に分かれて発表されたが午前中は基調講演だけのため、ポスターだけの時間帯は設定されなかった。

初日の 28 日には、2016 年に IAEG の Hans Cloose Medal 賞を受賞したトルコの Resat Ulusay 教授の記念講演に続いて、Scott Burns IAEG 会長による環太平洋域の自然災害、千木良雅弘日本応用地質学会元会長による地すべり崩壊前の重力変形に関する基調講演が行われた。2 日目は 5 人の基調講演があり、ネパールとインドの研究者からヒマラヤの地質研究や地震災害、ゴルカ地震後の復旧、また、イタリアの Fausto Guzzetti 博士から降雨による地すべり予測の講演があった。

3 日目は 4 人の基調講演があり、長谷川修一教授がヒマラヤと四国山地の共通性に基づいた変動帯の応用地質、島根大学の汪発武教授によるせき止め湖の決壊予測、ほかトレンチによる活断層調査や衛星データによる地表変動観測の講演がなされた。

全体的に地すべりに関する話題が多く、また、2015 年にネパールで発生したゴルカ地震に関する話題も多かった。展示ブースには日本から、(株)応用地質、ICGdR、KUMONOS、アースキャニング協会が出展を行った。2020 年に第 36 回 IGC を開催するインドからの出展もあった。



写真-1 11月30日 ARC-11会場前にて

3. 第 15 回海外調査団

調査団は長谷川修一団長以下 20 名で構成した。大部分の団員がプレツアーEX-1 に参加し、ポストツアーEX-5 ; Japan Society of Engineering Geology (JSEG) special excursion(日本応用地質学会特別見学会ーゴルカ地震震源地, ポカラ盆地とカトマンズーポカラ間の地質災害)には全員が参加した。EX-1 では、あいにくヒマラヤは見えなかったが、カトマンズ盆地の地形と地質, 伝統史跡や建物, ゴルカ地震災害からの史跡の復旧状況等を見学した。総勢 70 人もの大人数であり昼食をとるのも大変であったが, 貴重な見学を行うことができた。

EX-5 では, ヒマラヤ山脈南側の地形と地質の観察, ヒマラヤ山脈を遠望することができ, 台湾やフランスを含めて 36 名が参加した。この見学会は, ヒマラヤ山脈ミッドランドの地形と応用地質的特性の観察, ゴルカ地震の被害と地質の関係等を主題とし, 長谷川団長が下見までされて計画された充実した内容であった。長谷川団長は所用のため一足先に帰国されたが, その後はネパール人のプラダン オム氏が引率した。

カトマンズからポカラへの往路は悪路をバスで長時間揺られたのと, 乾季のため乾燥とほこりで体調を崩す方も出たが無事に全行程を終えることができた。長谷川団長の説明によって, どの山を見ても地すべりで形成されたとまず考えるようになった。ポカラでは, サランコットの丘, 朝夕は宿泊ホテルの屋上, 最終日の日本山妙法寺からのアンナプルナ山群の眺望を楽しんだ。また, ポカラからの帰路の空からはヒマラヤ山脈の連続パノラマを見ることができた。

調査団参加者の最年少者は 32 歳であったが, 平均年齢は 55 歳超であり今後若手参加者の増が望まれる。



写真-2 日本山妙法寺にてヒマラヤ山脈 (アンナプルナ山群) を背景に

4. IAEG 総会の概要

開催日： 11月26日(日) 9時00分～17時30分

開催場所： カトマンズ ホテル Yak & Yeti

4.1 参加国等

参加役員：南ヨーロッパ担当副会長が欠席した以外の13名が出席

参加加入国：役員も含めて約35カ国、50人程度が出席。ネパールやブータンの陪席者が多く会場は満席であった。アジア地域からは、日本、中国、韓国、台湾、マレーシア、バングラデッシュ、香港、ネパールが出席した。日本からは、千木良 IAEG 代表のほか、茶石、伊藤の3名が出席した。

4.2 主な議題

- ・会長活動報告、事務局長活動報告、会計報告と来期予算および新会費の説明と審議
- ・各地域の副会長による活動報告
- ・Web サイト管理者報告、ブリテン編集長報告
- ・管理委員会報告
- ・TOC (Technical Oversight Committee)と研究部会報告
- ・新期加入国
- ・今後のアジア地域会議開催地
- ・IAEG 後援会議

4.3 主な話題

(1) 会員数

会員数は約4,270人で昨年から若干増えた。特にアジアではインドが134人(+96)、韓国125人(+93)、シンガポール120人(+30)となっており、次期以降のアジア地域会議開催候補国に活発な動きが見られる。インドについては、Deva 副会長は今後維持できるかどうか自信がないようである。日本は89名と若干減少した。

(2) 新期加入国等

一昨年はネパールとマレーシア、昨年はアフリカで新規加入があった。今回は、アジアから台湾(Chinese Taipei ; 116人見込)、バングラデッシュ(27人)、イラク(11名)が正式に承認された。Chinese Taipei は、中国との関係で調整した結果の苦肉の策であり士気は高いように思われる。このほか、ミャンマーが加入を希望しているようであるが、正式表明はされなかった。イランはブリテンへの投稿が多くメンバーも102人登録されているが会費支払が滞っている。昨年 JSEG と共同で VietGeo2016 を開催したベトナムは6年滞納している。北部ヨーロッパの活動が停滞気味で、ノルウェーは完全に離脱した。

(3) 若手会員

IAEG では若手会員(40歳以下)の人数調査を行っており、若手技術者委員会を作

って活動を開始している。主な国の若手会員が占める割合は以下のようになっている。

11月27日の午後に若手会員の集会在企画され、16名が参加した。

表-1 若手会員の占める割合

国	会員数	若手会員数	割合
中国	585	163	28%
オーストラリア	311	108	35%
ドイツ	520	106	20%
トルコ	132	44	33%
南アフリカ	153	39	25%
韓国	125	29	23%
日本	89	2	2%

(4) 新会費

2019年からブリテンが完全電子化されることに伴い会費が改定される。専門委員会で検討した結果以下が提案された。

表-2 会費改定案

区分		現行	案-1	案-2
会誌あり会員	低収入国	29€	16€	19€
	高収入国	37€	24€	32€
会誌なし会員	低収入国	4€	4€	7€
	高収入国	12€	12€	20€
賛助会員		150€	150€	150€
年度収支見込			▲300万円	+10万円

低収入国から会誌なし会員の値上げを軽視しないでほしいとのコメントがあったものの、投票による採決の結果、案-2を採用することが決まった。また、学生会員(特に低収入国)を設定するべきとの意見が出て来年度に議論することになった。

(5) Commission(研究部会)

10の部会から活動報告が提出され、いくつか出席者から説明された。骨材研究部会(トルコが活動の主体)と海洋応用地質部会(中国が主体)が活発である。地すべりの国際用語に関する研究部会(C-37)からの出席はなかった。

(6) ブリテン編集長報告

相変わらず投稿数が年間約950と非常に多く、編集委員は現在65名であるが不足している(日本人はいない)。投稿は半数が中国で、イランとトルコを合わせると約7割を占めており、アジア地域からが約76%に上っている。ちなみに日本は1%にも満たない。

投稿論文の約 8 割がリジェクトされる状況で、一因として質の問題があり、技術論文の書き方の講演を行っている。また、査読者が不足している。

2016 年のインパクトファクターは昨年の 1.252 から 1.901 まで上昇した。

現編集長の Martin Culshaw は 2018 年いっぱい引退する。2018 年は香港の Louis Wong が副編集長を、2019 年からはトルコの Resat Ulusay が編集長をつとめる。

(7) Web サイト管理者報告

イタリアの Giorgio Lollino が欠席したため Daniele Giordan が報告した。

日本からの HP へのアクセス数は 7 番目(4%)と比較的多い。今後、各国の HP と IAEG の HP のリンクを進める予定である。

(8) 今後の IAEG 後援会議

・第 12 回 IAEG アジア地域会議

2019 年の 10 月か 11 月に済州島で韓国学会の創立 30 周年記念と合わせて開催する計画で、Jang Bo-An 代表からプレゼンがあった。また、日本語が堪能な Yong Seok Seo が熱心に勧誘活動を行った。相当な力の入れようであり、資金的にも援助がなされているように思われる。日本と韓国学会は 2005 年に協力協定を結んでおり、今後は会員への情報伝達などの協力をしていく必要がある。なお、この会議に合わせて IAEG 役員会と総会が行われる予定である。

・第 13 回 IAEG アジア地域会議

第 13 回については、シンガポールが立候補しており総会に出席してアピールした。しかし、一昨年に候補から外れたマレーシアも望んでいること、インドネシアも希望しているらしいことが報告された。会長が決議しようとしたが、時機尚早という意見により次回以降に決めることになった。

・第 13 回 IAEG コングレス、サンフランシスコ

会長から準備状況について報告がなされたが、来年の 9 月の割には準備が遅れているように感じた。噂によるとサンフランシスコのホテル事情も厳しい状態らしい。AEG と IAEG との共催なので AEG に主体があることが対応が鈍いことの理由と想像される。 kongress で発表するアブストラクトの募集締め切りは 3 月末である。

次回の総会は、2018 年の 9 月 16 日にサンフランシスコで開催される。ここでは、第 14 回 IAEG コングレスの開催地が決まる。2010 年の第 11 回の開催地から落選した中国が再び候補地になる模様である。また、2019 年 1 月からの役員改選が行われる。その募集は通常 2018 年 2 月から始まり 5 月に締め切られる。アジア地域では韓国から候補者が出るとの情報がある。